

礼 拝 説 教 要 旨

2011年9月11日

赤江弘之牧師

『千年に一度のこの年に！』

詩篇90：1～12

はじめに

移ろう草のよう 3～6節

小林一茶の「おらが春」

松尾芭蕉の俳句

蓮如上人の御文章の「白骨の章」 10節

「それ、人間の浮生なる相<sup>ふしやう</sup>をつらつら観<sup>すがた</sup>ずるに、凡<sup>おおよ</sup>そはかなきものは、この世の始中終<sup>しちゆうじゆう</sup>、幻の如くなる一期なり。されば未だ万歳<sup>まんざい</sup>の人身<sup>じんしん</sup>を受けたりという事を聞かず。一生過ぎ易し。今に至りて、誰か百年の形体を保つべきや。我や先、人や先、今日とも知らず、明日とも知らず、おくれ先だつ人は、本の零<sup>もと</sup>・末<sup>しずく</sup>の露<sup>すえ</sup>よりも繁<sup>つゆ</sup>しといえり。されば、朝<sup>あした</sup>には紅顔<sup>こうがん</sup>ありて、夕<sup>ゆうべ</sup>には白骨<sup>はっこつ</sup>となれる身なり。既に無情の風来りぬれば、すなわち二<sup>ふたつ</sup>の眼たちまちに閉じ、一の息ながく絶えぬれば、紅顔むなしく変じて桃李の装を失いぬるときは、六親<sup>ろくしん</sup>・眷属<sup>けんぞく</sup>集まりて歎き悲しめども、更にその甲斐あるべからず。さてしもあるべき事ならねばとて、野外に送りて夜半の煙と為し果てぬれば、ただ白骨のみぞ残れり。あわれともいうも中々おろかなり。されば、人間のはかなき事は老少不定のさかいなれば、誰の人も、はやく後生<sup>ごしょう</sup>の一大事を心にかけて、阿弥陀仏<sup>あみだぶつ</sup>を深くたのみまいらせて、念仏申すべきものなり。」  
(御文章五帖目十六通)

人の子らよ、帰れ

死の原因 7～9節

永遠の住まい 1～4節

大津波、山津波のように 5～6節

手のわざを確かなものに

モーセの祈り 12～17節

むすび

讚美歌88番を味わい、わが祈りとする！ それが「神の人」です。